

2026年度 入試問題分析シート

東京大学

前期日程

科目

化学

総括

試験時間	2 科目 150 分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	2 科目 120 点	分 量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

2025 年度までと同様、理論、無機、有機分野から大問 3 題の構成であった。昨年と同様、各大問で 1 テーマの形式であった(2023 年度までは、大問が 2 つのテーマ問題(I, II)に分かれていることが多かった)。出題順序も昨年と同様、第 1 問が理論分野、第 2 問が無機・理論分野の融合、第 3 問が有機分野であった。昨年に比べ、難易度が大きく下がり、分量も減ったため、試験時間内で解答を作ることができる問題であった。第 1 問、第 3 問は東大としては容易な問題であり、合格には高得点が必要となるだろう。第 2 問はやや難しく、実験条件などを注意深く検討した上で解答しなければならない問題であった。出題内容は多岐の分野にわたり、例年通り、幅広い学習が要求された。

〈特記事項・トピックス〉

正誤選択問題(「すべて選べ」の形式)が大幅に増加した。解答が 1 つだけ、または 5 つ全部である問題もあった。有機では、三員環への Br_2 付加がノーヒントで問われた(2023 年度の出題では本文に書かれていた)。東大頻出のジアステレオマー、メソ体などに加え、軸不斉(第 3 問のケ)もとりあげられた。構造決定は Br_2 がトランス付加することを知っていると素早く解ける問題であった。高分子は出題されなかった。

〈合格への学習対策〉

基礎を深く正確に理解し、種々のテーマについて自力で考察していく能力を高めることが大切。確実に解答できるところを的確に見抜くセンスも磨きたい。過去と似たテーマも出題されるので(例えば、ゼオライトは 2007 年度、水蒸気改質は 2018 年度など)、直前期は過去問演習もしっかりと行いたい。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
第 1 問	記述 選択 論述	化学基礎 化学	結合、結晶 化学反応と熱 気体の法則 化学平衡 電池 電離平衡	物質全般について、化学的に様々なテーマについて幅広く問われた。イは基本的な有機物の結合距離に加え、 H_2 と N_2 の結合距離も比較する問題であった。クは燃料電池の反応式を示す問題だが、電解質が液体ではないので、 O^{2-} が反応式に含まれる。エの解答において有効数字は「1 桁」であったことに注意したい。コは塩酸濃度と pH の関係を示すグラフであり、塩酸濃度が極めて低くなると、pH は 7 に近づくことに着目して選択する。	やや易
第 2 問	記述 論述 選択	化学基礎 化学	酸と塩基 化学平衡 無機化合物 (SiO_2 , ゼオライト)	ゼオライトを題材とした総合問題。イは容易な問題であるが、「すべて選択する」ことに戸惑った受験生もいるだろう。ウは落ち着いて計算すればよい問題。カの論述問題はどのような解答を示すか迷い、手が止まる時間ができてしまいそうである。キの実験 9 では、「pH6.0 まで」という表現に戸惑うかもしれないが、メチルレッドを使った中和滴定だと思えば、容易に解答できたはずである。クは近年頻出の初見の関係式を用いて計算および論述する問題であった。	やや難
第 3 問	記述 論述 選択	化学基礎 化学	有機物の沸点 有機反応 立体異性体 有機物の構造決定	前半は有機物の特徴、後半は立体異性体(メソ体など)と構造決定という東大頻出のセットである。ア～エで問われた有機物には、見慣れない物質が含まれていた。また、 Br_2 と反応する物質として B を入れるべきか悩んだ受験生もいるだろう。カとキは東大頻出のテーマなので、しっかりと得点したい。クの構造決定は容易だが、P～R の構造を考える際には、立体的な特徴を把握する必要があった(Br_2 のトランス付加)。ケは軸不斉についてであり、東大でははじめて問われた内容である。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を 5 段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。